さらば、おやじどの

上野 瞭

田島征三・絵

理論社

さらば、おやじどの

野瞭

田島征三・絵

理論社

作＝上野 瞭　　さらば、おやじどの
絵＝田島征三　　NDC913 A5変型 20cm 654p
ISBN4-652-01412-0

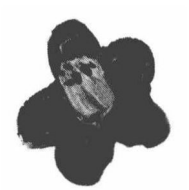
1985年8月第3刷発行

発行所＝＝株式会社 理論社　発行＝＝山村光司
東京都新宿区若松町15-6　電話03(203)5791　振替東京9-95736
©1985 Ryo Ueno, Seizo Tashima Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

さらば、おやじどの

目次

第一章　事件の前ぶれ　7
第二章　七兵衛登場　20
第三章　佐平次お取り調べ　35
第四章　続・佐平次お取り調べ　48
第五章　お屋敷町で　61
第六章　新吾お召し取り　74
第七章　もうひとりの佐平次　89
第八章　影の世界で　102
第九章　お牢入り　115
第十章　牢獄ぐらし　128
第十一章　大罪人　141
第十二章　父と子　155



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第十三章　料亭「みやび」で　169
第十四章　おたきさんに似た女　182
第十五章　囚人杢兵衛　195
第十六章　おもの川氾濫　208
第十七章　はるかな駒洗い村　223
第十八章　杢兵衛のながい旅　237
第十九章　鳥見多三郎登場　250
第二十章　水車小屋での殺人　263
第二十一章　自白　276
第二十二章　草庵先生に聞く　289
第二十三章　とむらい山の中腹で　302
第二十四章　おけいさんの小指　316

第二十五章　「おさばき」を問う　330
第二十六章　事件の調書　344
第二十七章　御城下の町かどで　357
第二十八章　もと村方御番所頭　371
第二十九章　まんじゅう屋「ひねり餅」で　385
第三十章　脱獄　398
第三十一章　突然の出来事　412
第三十二章　逮捕　425
第三十三章　尋問　438
第三十四章　ふたたび父と子　452
第三十五章　追放　466
第三十六章　法の名において　479

第三十七章　夜の町「川しも」で　492
第三十八章　新吾と兵馬　505
第三十九章　ざれ歌「相聞くずし」　518
第四十章　走る影　532
第四十一章　父の手紙　547
第四十二章　みまさか野盗討伐隊　560
第四十三章　「みまさか」以後　574
第四十四章　お葬式　587
第四十五章　美馬さま語る　600
第四十六章　一枚の紙切れ　613
第四十七章　わかれ道を前にして　627
第四十八章　提灯ぶらぶら　640

装画・さし絵　田島征三
装幀　平野甲賀

第一章　事件の前ぶれ

「ここでいいだろう。新吾。それじゃ始めるか」

お屋敷町の北の木戸のすぐそばで、一色兵馬がふところ手のままふり向いた時、新吾は、じぶんの体がびくりとふるえるのを感じた。胃袋のあたりが、一瞬ひきつった。

覚悟をきめていたはずなのに、ひざのあたりから力がすうっと抜けていく。

「このあたりは、なんだな、おれたちのいるさむらい長屋とはまるっきり違っているぜ。人影ひとつなく、しいんと静まりかえっている。どうなってるんだ。みんな、お屋敷のなかで昼寝かい。それとも、床の間でもにらんで、じっと坐りこんでいるのかい」

岡野孫兵衛がいった。

岡野孫兵衛は、服部次郎太と二人して、新吾を両側からはさむように突っ立っている。新吾のうしろ

には、金子与一郎と狩谷半蔵がいる。

「気にくわねえな。これじゃ、せっかくの楽しみが、おれたちだけのものになる。どうだ、新吾。ここはひとつ、『お屋敷町のみなさん。だだ今から田倉新吾が走ります。生まれたままの恰好で通り抜けます。どうか表にでて、ごらんになってください』そういって怒鳴っちゃどうだ」

服部次郎太がいった。

「次郎太。今から新吾をビビらせちゃだめだよ。そうでなくても、新吾のやつ、おれたちに囲まれてブルッてるんだぜ。ここで泣かれてみろ、楽しみどころでなくなるぜ。そうだろ、半蔵」

金子与一郎がいうと、狩谷半蔵がにやにや笑いながら答えた。

「与一郎のいうとおりだ。おれたちは、もっと思いやりをもって、あたたかく新吾を見守ってやらなきゃならねえよ。いつも、塾の草庵先生がいってるじゃないか。人間、大事なのは、他人さまへの思いやり、やさしさだと。やさしく新吾を見てやろうぜ」

（なにが、やさしさだ）

新吾は、目の前の風景がふっとかすむのを感じた。

（おれは、びびっても、ぶるってもいないぞ。はだかになるだけじゃないか。はだかになるのが、おまえたち、そんなにおもしろいのか。こういうことは、風呂にはいるのとおなじであって……）

新吾は、むりやり平気な顔をしようとした。顔がひきつった。頭の片すみに、別の考えがちかちか浮かんでは消える。

（あの時、遅刻していても、草庵先生の塾にいっていれば、こうはならなかったので……。いや、さぼっちまったのは仕方ないとして、梅林のあの道を、雑木林のほうにまがらなければ、こうはならなかったので……）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

新吾は、じぶんに舌打ちした。

はじまりは道だった。草庵先生の塾をさぼった新吾は、すて川の土手をくだると、薬草園の横を梅林まで歩いた。さぼるのは、はじめてではなかった。これまで何度か、塾の前からまわれ右をしたことがあった。とむらい山の墓地を抜けて、頂上の無縁堂のあたりで時間をつぶした。塾がきらいなのではない、空が青すぎたからだった。人影のない墓地で、明るい陽ざしを浴びて、御城下の家々を見おろしていると、ひどく満ちたりた気持がした。じぶんが、御城下の暮しからも塾生であることからも、ひとりだけ抜けだして別の世界にいるような気がした。

おきまりのその道をたどらず、梅林へ足をのばしたのは、ただの気まぐれだった。

梅の花はとっくに散って、無数の枝が、地面にあわい影を落としていた。ちちちと、どこかで鳥の声がした。

梅林には、時どき、御城代の美馬さまが姿をあらわし、画帖をひろげていることがあった。美馬さまは小柄な老人で、眠っているように目が細かった。花が咲いていようがいまいが、枝を眺め、ゆっくりと絵筆を動かしていた。人が見ていても、ふり向きもしなかった。

その美馬さまも、また、見廻り番の姿もなかった。

新吾は、梅林に続く雑木林のところまできて、ふと足をとめた。いいんという馬の声を聞いたように思った。馬小屋のあるような場所ではなかった。密生した木立が、陽の光りをさえぎり、雑木林の奥は、暗くひんやりとかげっていた。そのまま雑木林にそった道を進めば、何事も起こらなかったはずだ。新吾はそうするかわりに、雑木林のなかに足をふみいれた。冬の名残りの枯れ葉が、しめった土の上に積みかさなっていた。

最初に、鞍をつけない五頭の裸馬を見た。雑木林の中ほどの、わずかに木立の切れた場所だった。馬たちは、手綱のかわりに荒縄を首にまきつけられ、細い幹につながれていた。前足で地面をかいたり、首を左右にふったりしていた。ふとい息をはいている馬もいた。

新吾はすぐに、じぶんをみつめるするどい視線に気づいた。目がなれると、うす暗い木立を背にして、五人の若ものが息をつめて立っているのがわかった。口をきいたことはないが、おなじ草庵塾の塾生で、常に一団となって行動を共にしている連中だった。

「おれたちを尾けてきたのか」

新吾は、なにをいわれているのか、とっさにわからなかった。わかったのは、それが一色兵馬だなということだった。

兵馬は、ひややかな目でまっすぐ新吾を見た。

(感じの悪い子ねぇ。見たところ、なかなかの男前なのに、あの子は態度がでかいね。挨拶しても、人をばかにしたみたいに、そっぽ向いてる感じ。新吾。あんた、つき合ってないでしょうね。あれじゃ草園頭の一色さまも御苦労なさるわよ)

いつか母親のまきがそういったことを、新吾は、一瞬思い浮かべた。

「兵馬、こいつは、おれたちを見てしまった。どうする」

木立の暗がりからゆっくり進みでたのは、岡野孫兵衛だった。

孫兵衛は、ふとい眉のずんぐりした体つきの塾生だった。鼻の頭にうっすら汗を浮かべ、大きな目をぎらぎら光らせていた。新吾は、草庵塾への行き帰り、肩をいからせ、すれ違う相手をだれかれなしにぎろりとにらむ孫兵衛をおぼえていた。

服部次郎太と金子与一郎は、首から黒い布を長くたらしていた。それが、はぎとったばかりの黒覆面

の布であることは、すぐわかった。二人のあとから新吾に近づいてきた狩谷半蔵が、まだ黒覆面をとき終っていなかったからだ。

新吾は、そうか、と思った。そうだったのか、と思った。道場の鉄心先生の言葉が頭のなかを走り抜けた。

「おまえたちのなかに、今、噂になっている黒手組とかいうばかものはおらんだろうな。たぶん、この道場にきているものに、そういう不心得ものはおらんと、おれは信じている。しかし、御番所から注意してほしいと連絡があったので一言いっておく。馬というものは、馬術を修得するためにせめるものだ。それも遊びのためではない。それなのに、定められた馬場でのりまわさず、御城下のいたるところを、顔をかくして馬で駆けまわるばかものがいる。気違いざただ。もし、おまえたちのなかに、そのばかものどもを知っているものがあれば、すぐさま申しでろ。そういう危険な連中は、御番所の手で罰してもらわねばならぬ」

鉄心先生はその時、犯人を探るように一人一人の顔を見ながらいった。

裸馬にまたがった黒覆面の一団が御城下を暴走する話は、鉄心先生からいわれる前、すでに道場でも草庵塾でも、噂になっていた。

新吾は見たことはなかったが、塾生のなかには何人も目撃したというものがいた。

一団は、おもの川の堤防を南から北へ駆け抜けるかと思えば、突然町なかに姿をあらわし、人家の建ちならんだ狭い通りを右に左に風となって走り抜けた。買物帰りの町方のかみさんが、いきなりとびだしてきた一団の馬にうろたえ、そばの板塀にはりついたまではよかったものの、持っていた豆腐もおからも地面に叩きつけられ、その上を踏みつけ、一団の馬が、蹴散らし、あっという間に消え去った……

というたぐいの話は、新吾の耳にもはいっていた。

暴走馬の巻きあげる砂煙りで、商家の売りものの魚や野菜がほこりまみれになり、大きな損害をだしたという話や、また、疾走する馬のすさまじい音で、子どもがおびえたり、赤ん坊がひきつけを起こしたりという話もあった。散歩途中の老人が、ひづめにかけられ、瀕死の重傷をおったという噂もあった。

町方御番所は、一団の身もとを割りだし、逮捕しようと動きまわっていたが、連中がなにものなのか、手がかりさえつかんでいないということだった。

「困ったやつらだ。馬にのって走りまわりたいという気持はわからないでもない。馬は、わたしたち人間と違って、飛ぶように早いからな」

たまたま、食事の時、新吾の父、田倉兵庫がひとりごとのようにいったことがあった。

兵庫は、御城下の四つの町方御番所、また、御領内各地に置かれた村方御番所を監督する御番所頭だった。家ではめったと役所のことを話さないが、その時は報告書のことが気になっていたのかもしれない。

「しかし、いくら早くても、それは馬の早さだ。のり手の早さではない。そこのところを、だれだかわからぬが、その連中は忘れているようだな。新吾。そうは思わないか。馬で駆けまわっていると、いつのまにか、それをじぶんの早さのように取り違えてしまうものだ」

兵庫は、それ以上のことはいわなかった。

新吾は、（それはそうだが）と思った。それはそうかもしれないが、だからといって、鉄心先生のいうように、ばかなこととも思わなかった。塾がない日は道場へ通い、道場が終れば塾での学問の復習をする毎日に、時どきうんざりしていたからかもしれない。そういうきまりのある暮しのなかで、そういうきまりを無視して、めちゃめちゃに馬を走らせる連中に、ひそかに感心した。じぶんはせいぜい、塾をさぼることくらいしかできないのに、連中は、だれもやらないすごいことをしているのだと思った。

（いったい、だれなんだろう）と考えることはあった。しかし、（だれだっていいじゃないか。どうせ、

おれとは違った根性のすわったやつにきまっている。おれに、あんなことはとうていできない）すぐに新吾は、それ以上のことを考えることはやめてしまった。

それが、突然、考えもしなかった時に……。

「まずいぜ、これは。な、相手が悪いやね」

みんなにおくれて黒覆面をとき終った狩谷半蔵が、大げさに顔をしかめた。半蔵は、本気でそういったのかもしれないが、新吾には、おどけているように聞こえた。半蔵は、草庵塾でも、ふいにすっとんきょうな声をあげて、草庵先生を困らせていた。兵馬たちと仲間を組んでいるのに、そのなかの孫兵衛とは正反対の気さくな若ものだった。

「な、みんな、どうするんだい。ここまで見られちゃ、おれたちみんな、お縄ものだぜ。いくらおなじ草庵塾の塾生だといっても、新吾は御番所頭の息子だものな。『父上。わたしは御城下をさわがしているふとどきな連中の正体を突きとめました。どうか父上のお手柄にしてください』なんちゃって、おやじどのの前で鼻をぴくぴくさせるんじゃないの」

半蔵は、じぶんの鼻の穴をふくらませてぴくぴくふるわせた。

だれも笑わなかった。反対に、与一郎と次郎太は、じぶんの脇差しに手をかけて、だまって新吾にすりよってきた。かすかな殺気が感じられた。

新吾は、息をととのえると半蔵を見た。

「おれは、あんたのいうほど親孝行じゃないよ」

それから新吾は、兵馬をふりかえり、孫兵衛を眺め、与一郎や次郎太のほうを見た。

「あんたたちは信じないかもしれないが、おれは、あんたたちのことをだれにもいうつもりはない」

「信じられないな、そいつは」

孫兵衛が切りかえすようにいった。
「おれも孫兵衛の意見に賛成だ」
次郎太がすぐに合槌をうった。
「おれも、おなじだ」
与一郎が、足もとの石を蹴った。
「だから、信じないかもしれないけれど……と、おれ、いってるんだ。信じようが信じまいが、おれは告げ口屋じゃない。おれは、あんたたちを尾けてきたわけじゃないし、尾ける気などない。梅林を歩いていて、たまたまここにきてしまっただけだ」
新吾は、馬の鳴き声のことはいわなかった。
「ただじゃ帰せないな。片づけたほうがいい」
次郎太がうめくようにいった。
新吾は、じぶんの胸がどきどきするのを知った。
「あんたたちは、おれが裸になって御城下でも走らないかぎり、おれのいうことなど信じられないのだろう」
次郎太がふっと目を細めた。
新吾は、じぶんの声がうわずっているのを感じた。
「もし、それで信じてくれるなら、おれは、御城下をふんどしをはずして走ってやる。嘘じゃない。それでも信じられないというのなら、これはもう、好きなようにしろよ」
次郎太の目が意味ありげに、与一郎と半蔵に向けられた。二人の目もとに皮肉な色が浮かんだ。肩をいからせていた孫兵衛も、いたずらっぽく表情をくずした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com